

氏名	いわた すみこ 岩田 澄子
学位の種類	博士（国際コミュニケーション）
報告番号	甲第1号
学位授与年月日	平成26年3月21日
学位授与の要件	学位規則第4条、武蔵野学院大学大学院学則第20条第2項及び学位記授与に関する規程第3条第3項の規定による
学位論文名	天目茶碗と日中茶文化研究 —中国からの茶文化伝播と日本での展開—
論文審査委員	主査 武蔵野学院大学 教授 坂詰 力治 副査 武蔵野学院大学 教授 劉 金釗 副査 武蔵野学院大学 教授 佐々木 隆

論文の内容の要旨

本論文は、「天目茶碗」を日中茶文化の接点となる存在として捉え、次の三章からなる視点で考察する。すなわち、天目茶碗に関する研究を主軸とするが、その考察の過程で浮上した日中茶文化に関する諸論点についても検討を行うものである。

第一章「中国から日本へ伝えられた茶文化とその展開」では、「天目茶碗」についての考察の前段階として、茶をめぐる日中茶文化の背景について概観する。第一節「薬用の茶と嗜好品の茶」では、茶を薬用植物として考察し、現在中国の医療現場で使われている『中薬（薬）大辞典』にみる茶、唐代に始まる嗜好品の茶と薬用の茶の関係、唐代の『茶経』にみる薬用の茶に対する評価とその影響について述べる。第二節「中国から日本へ請来された三種の喫茶法」では、中国では唐代・宋代・明代において、製茶法の進展とともに新たな喫茶法が考案され、それは日本へも請来された。この三種の喫茶法は、日本の従来説では茶の形態に注目して、団茶法・抹茶法・煎茶法とよばれてきたが、この呼称は日中の喫茶の実態を示していないことが明らかとなっている。一方現在は中国喫茶資料に基づき、茶液を作る時の操作に注目して、煎茶法・点茶法・泡茶法とよぶ訂正説が提唱されているが、重要な喫茶用語（煎茶など）の語義が日中で異なるために混乱をきたしやすく、現在も従来説が訂正されにくい現状を指摘する。そしてこの呼称の混乱に対する方策として、公定の医薬品基準規格書の『日本薬局方』の製剤用語（煎剤・懸濁剤・浸剤）を準用し、

日中の語義の違いに左右されない茶液の性状という視点を加えた分類法を提案する。

第二章「天目茶碗考」では、日中の諸資料を参照しながら、「中国と日本で実際に使われていた碗類」という視点で天目茶碗について考察する。第一節「点茶法の茶と天目茶碗—中国と日本における碗類使用状況—」では、点茶法の茶と中国と日本で使われた碗類の関係について明らかにする。まず、中国で点茶に相応しいとされた天目茶碗の特徴を、外形上と用法上とから捉え、外形上の特徴として、①黒色系の釉薬、②胎土の材質は陶器の一種、③台（足付きの茶托）に乗せるのに適した形の三点を挙げる。また用法上の特徴として、天目茶碗は中国の時と同様に基本的に台にのせて使う格の高い道具とされ、点前作法や使用場面で他の茶碗と区別されていたことを確認する。次に中国資料を参照して、中国で宋代から天目茶碗が盛んに生産され、明代にその生産が終了した背景について考え、さらに日本資料から、日本における天目茶碗の存在を、高麗茶碗や和物茶碗との関係から考察する。第二節『君台観左右帳記』からみる天目茶碗の産地と種類』では、天目茶碗の産地と種類について、中国の建窯・吉州窯・茶洋窯の発掘調査や『君台観左右帳記』を参照して検討する。また、『君台観左右帳記』での「建盞」と「天目」の語義を確認し、それを『山上宗二記』と比較して、「建盞」と「天目」の語義が変化した背景について考察する。第三節「十六世紀の茶会記にみる天目茶碗の状況」では、十六世紀は「茶の湯が興隆し、当初は天目茶碗が頻繁に使われていたが、急速に和物茶碗や高麗茶碗が主流になる」という過渡期に相当し、その当時の碗類の使用状況が変化した様子と、天目茶碗の特殊用法（「台なし」など）について、十六世紀に記された『松屋会記』『天王寺屋会記』『宗湛日記』の三大茶会記を中心に考察する。さらに初期の茶の湯の様子を伝える『烏鼠集』や十七世紀以降の点前書も参照して考察し、十六世紀中頃以降に「天目」と総称されるようになった碗類は、中国由来の格の高い道具と認識され、特有の点前作法が伝承されていることを確認する。第四節『「天目」の由来再考—「天目」の碗名が使われ始めた時期とその背景について』では、「天目」という碗名の由来について、従来は「南宋時代に中国浙江省の天目山の禅院から日本僧が持ち帰ったから」と説明され、「天目」の碗名の初出は元時代（1335年）であることが示されても、その背景の考察や根本的な見直しが行われていない。それに対し、『仏日庵公物目録』などの禅宗関係諸資料を参照して考察し、「天目」という碗名が使われ始めたのは元時代で、天目山を拠点に活躍した中峰明本という一人の禅僧が関係しているという見解を示した。第五節「「天目」と「茶わん」の関係」では、十六世紀以降に始まる茶の湯資料では、碗類が「天目」と「茶碗」が区別されているが、その区別の基準について検討する。そして現在は“器形の違い”とする説が有力であるが、これまでの検討から、「天目」と「茶碗」は“点前作法の違い”で区別されていたのではないかと指摘する。また、室町将軍家の座敷飾りの手引書である『君台観左右帳記』と、茶の湯資料の『山上宗二記』を比較し、時代や関心事の変化によって、碗類の分類基準とともに、「天目」や「茶碗」の語義が変化していた様子を図表によって説明する。

第三章『日中茶文化の諸論点』では、天目茶碗の研究を通して日中双方の茶文化を考察してきた結果、従来の茶文化研究で見落とされていた次の三節からなる論点について明らかにし、検討する。

第一節「平重盛伝来の箱書を持つ内金張茶碗（射和文庫蔵）について—唐物天目茶碗のような外観をした、金属製茶碗の調査—」では、茶碗が収納されている箱の蓋裏に小松重盛（＝平重盛）を筆頭に八名の名前が列挙されている箱書についての考察とともに、茶碗現物の金属成分の分析・作製法の調査などを科学的手法によって行った。第二節「青磁茶碗『馬蝗絆』の語義について」では、『平家物語』の「金渡」の条と『源平盛衰記』の「育王山に金を送る事」の条に関連づけられた逸話があり、わが国に伝わる唐物道具の中で最古の伝承を持つことで知られる青磁茶碗の碗名「馬蝗絆」の語義について、語学的観点から考察する。第三節「岡倉天心は、なぜ茶の湯を道教にたとえたのか」では、岡倉天心が英文で著した『茶の本 THE BOOK OF TEA』の中で、茶の湯に関する説明を道教（タオイズム）にたとえた理由や、その背景について考察する。茶の湯は禅宗と関係が深いことが知られるが、天心は「禅宗は道教の正当な後継者」「茶の湯は変装した道教」と説明した。しかしこれは「天心特有の考え方」とされ、この道教に関する問題は、これまでの茶の湯研究で正面から検討されることのなかった論題である。しかし、近年の道教研究の成果を踏まえて、天心が置かれていた状況や、中国・欧米・そして日本の宗教を含めた文化の状況を概観し、日本では中国の土着宗教である道教の実態がほとんど理解されていないのに対し、欧米では道教の評価が極めて高かったこと、天心自身が熱心な道教徒であることを確認した。そして、天心が『茶の本』を英文で出版した真の目的は、欧米人に対し東洋の思想と文化水準の高さを示すことであるとされていることから、天心の「茶の湯の根底に道教の思想がある」という説明は、きわめて有効な手段であったのではないかと指摘して論を閉じている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、点茶法の喫茶に相応しい茶碗として南宋時代に中国から請来され、茶の湯に取り入れられた「天目茶碗」を、日中茶文化の接点となる象徴的な存在として捉え、天目茶碗を中心に、中国からの茶文化の伝播と日本での展開について、日中の諸資料を広く参照しながら考察した総合的研究である。

第一章では、まず、茶を薬用植物として考察し、中国の医薬書にみる茶、唐代に始まる嗜好品としての茶と薬用の茶との関係、唐代の『茶経』にみる薬用の茶に対する評価とその影響、混ぜ物をする茶との関係（擂茶など）について、岩間真知子『茶の医薬史』や本草書などの諸資料を参照し考察した。特に、現在中国の臨床現場で実用されている『中薬大辞典』に、茶葉や茶子（実）や茶樹根（根）に関する詳細な記載があることを指摘した

ことは、これまでの茶文化研究では参照されることのない資料だけに、概要を紹介した意義は大いに評価できる。また、喫茶法の呼称に関する問題はわかりにくい論点であるが、本論文では、現在明らかにされている日中の喫茶の実態を整理して、それが的確に理解できる呼称の問題があることを明らかにするだけでなく、さらに公定の医薬品基準規格書である『日本薬局方』（厚生労働省）の製剤用語を活用することを提唱し、その問題点の解決法まで考察したことは注目に値する。「煎茶」の語義が日中で全く異なることが茶文化の正しい理解を妨げている中、日本の従来説の不備を明らかにし、中国喫茶研究の成果が日本に浸透しにくい状況があるため、「茶液の性状」という、日中の語義に左右されない分類法を提案したことは極めて独創的であり、今後の円滑な研究を踏まえた考察として意義深い。

第二章では、茶の湯で使われた碗類全般と天目茶碗の違いを比較考察して、日中の喫茶関係資料をさまざまな角度から捉え直し、フィールドワークを踏まえて、用法を含めての天目茶碗の特徴を捉え見直したことは極めて画期的である。また、天目茶碗の種類については、天目茶碗研究の一級資料とされる難解な『君台観左右帳記』を基に、発掘調査だけでなく、釉薬実験や、更にはこれまで参照されていない漢文茶書（『和漢茶誌』や『茶教字実法鑑』など）をも活用し、新たな見解を明らかにした実証的考察である。本論文では、天目の語義が時代によって変化していることを認識し、「天目とは何か」を一言で論ずることは不可能と考え、第一章で日中における天目茶碗の状況を概観した後、12世紀以降の日本における状況を時期毎に分けて検討した。すなわち、①14世紀に「天目」という碗名が使われ始めたことと中峰明本という禅僧との関係、②15世紀頃成立の『君台観左右帳記』から考える天目茶碗の種類、③茶の湯が興隆する16世紀以降を対象とし、茶会記や点前書の分析を行い、茶の湯における天目茶碗の受容状況を調査検討した。そして最後に、「天目」と「茶碗」が区別されていた基準について、現在は器形の違いとする説（角川茶道大辞典）が有力であるが、天目茶碗が「天目」と総称されるようになるのは16世紀中頃以降のことで、点前作法の違いが意識される時期と符合するということ、点前書を見ると初期の茶書（天正時代の初め頃の成立とされる『烏鼠集』などをはじめ、江戸時代を超えて現在に至るまで、「天目」と「茶碗」は用法で区別されていることを根拠に、「天目」と「（天目以外の）茶碗」との関係は、点前作法の違いで区別されていたのではないかとの指摘は興味深く、かつ天目を考えるうえで極めて重要な点であると言える。

第三章では、天目茶碗を中心とした日中茶文化の研究過程において、従来の茶文化研究で見落とされていた三つの論点について、指摘・考察したものである。第一点は平重盛伝来の箱書を持つ内金張茶碗（射和文庫蔵）について、箱書の考察とともに、茶碗現物の金属成分の分析・作製法の考察を、それぞれの専門家の協力・教示を得て行ったもので、この種の先行研究のない注目に値するものと評価できる。第二点は、青磁茶碗「馬蝗絆」の語義について、従来、イナゴと解釈されてきた「馬蝗」を中国資料を参照し、漢字と中国語の観点からヒルであることを考証したもので、極めて説得力がある。第三点は、岡倉天

心はなぜ茶の湯を道教にたとえたか、という問題について、英文で出版した『茶の本』で天心が茶の湯を道教（タオイズム）になぞらえて説明したことに対して、日本、中国、欧米の状況を比較、考察したものである。茶の湯における道教の問題は、これまで正面から検討されることがなかった論題で、これから深められていくべき課題の提起であると言える。

本論文は、天目茶碗を美術品としてではなく、実用された碗として日中茶文化の接点となる象徴的な存在と捉え、茶会記や点前に関する古文書資料を参照し、その調査と分析を通して 特定の流派や時代にとらわれることなく考察した総合的研究として、その成果は極めて大きい。また、中国から日本にもたらされた茶碗は、黒釉の天目茶碗と青磁茶碗であるが、本論文では「天目」という碗名について深く考察するとともに、最も有名な青磁茶碗の「馬蝗絆」の語義についても現在の常識を覆す見解を示しており、日中の茶文化の接点を示す極めて興味深いものである。特に、三種の喫茶法の呼称に関する問題を、A, 日本の従來說（茶の形状による分類）、B, 中国喫茶資料に基づく訂正説（操作法の分類）をA説かB説かではなく、操作法と茶液の性状を同時に示し、日中の語義に左右されない薬剤用語（煎剤・懸濁剤・浸剤）を準用した分類法を活用することの提案を、図表によって整理し明確に示したこと。また、天目茶碗の種類について、『君台観左右帳記』をもとに、発掘調査だけでなく、釉薬実験や『和漢茶誌』などの漢文茶書を活用して、新知見を示したことは大きな意義が認められる。ただ、本論文は日中の茶文化を対象にして考察されたものであるが、中国の茶文化の基本文献（たとえば、『茶経』など）の掘り下げが不十分であり、また、叙述が冗長で文末表現に不明瞭な点があるなど、文章表現上に聊か不備が見られるものの、天目茶碗を中心とした茶の湯を学問の対象として実証的に研究したものとして、その成果は高く評価される。

以上の結果、本審査委員会は、博士後期課程三年岩田澄子に博士（国際コミュニケーション）の学位を与える資格が充分であると認める。